

研究構想図

学校教育目標

進んで学ぶ子・心豊かな子・明るくたくましい子

主題設定の理由

本校児童は、小規模校という固定化した人間関係の中で生活している。そのため積極的に思いを伝える必要性が少なく、また主体的に物事に取り組む力が不足している。そこで外国語活動を通して主体性を育み、自分の思いを伝えようとする児童を育成したいと考え主題を設定した。

研究主題

外国語を用いたコミュニケーションの楽しさを味わわせる指導方法の工夫
～聞くことを土台とした4技能の習得をめざして～

めざす児童像

4技能を使って自分の思いを伝えようとする児童

研究の仮説1

必然性のある場面設定を工夫し自然な英語をたくさん聞かせ、話す機会を作ることで、コミュニケーションを楽しみ、自分の思いを伝えようとする児童を育成できるであろう

○手立て1：たくさんの英語を聞かせる活動

○手立て2：児童に思考させる活動

○手立て3：ALT を活用する活動

具体的な児童像→「英語を話すときに、自分や他者の言葉を参考にして英語を組み立てようとする児童」

研究の仮説2

音声を大切にしたい聞く力を生かし、必要感をもたせた「書く・読む」活動を設定することで、自分の考えを見つめ直し、思いを伝えようとする児童を育成できるであろう。

○手立て1：音韻認識能力を高める活動

○手立て2：相手を意識した「書く・読む」活動

具体的な児童像→「アルファベットを見たときに、蓄積された音を頼りにして読んだり書いたりしようとする児童」

研究の仮説3

ゴールを明確にしたプロジェクト型の活動を設定することで、4技能を主体的に活用し、英語でコミュニケーションを楽しみ、自分の思いを伝えようとする児童を育成できるであろう。

○手立て1：外国人との交流をゴールとした活動

○手立て2：他学年や地域への発表をゴールとした活動

具体的な児童像→「活動に取り組むときに、必要な内容と英語を自分で考え、まとまりのある文を組み立てようとする児童」

村君小外国語活動を貫く3つのポイント

聞かせる

何度も繰り返し英語を聞かせて、英語の音に慣れ親しませ、聞こうとする態度を養う。

思考させる

フレーズの単なる繰り返しではなく、自分で考え思いを伝える活動を工夫する。

ALT を活用する

学校生活の様々な場面で、児童が学んだ英語を試す相手として生かす。

習得を目指す4技能

聞くこと

Small Talk・歌・絵本など、繰り返し英語を聞くことができるよう活動を工夫して、自然な英語をたくさん聞かせ、英語の音に慣れ親しませる。これにより、たくさんの英語の音を蓄積していく。



話すこと

英語を繰り返したっぶり聞かせることで、児童の「使ってみよう」という気持ちを高める。さらに自然な発話を引き出す働きかけをする。登校時の Morning English では、ALT とのやりとりを通して発話の自信を高める。



読むこと

素直に音を受け入れる小学生の特性を生かし「読む力」を育成する。「きく力」を生かした「音→文字」へつなげる活動を工夫し、疑似リーディングや児童の思いを文字化した文章を通して、読みたくなる環境を整える。

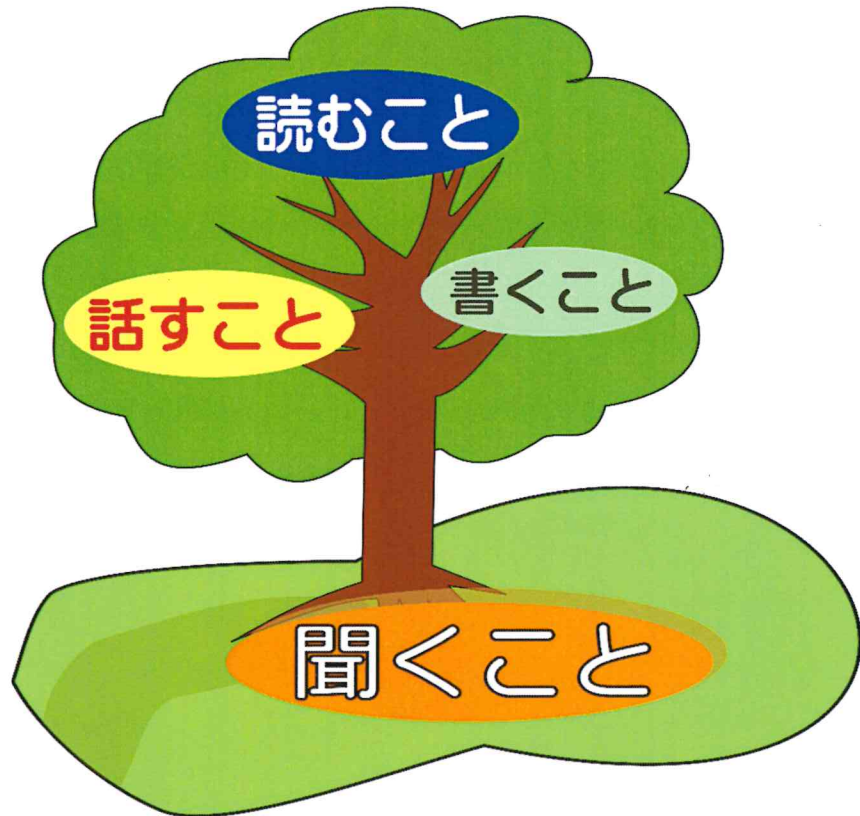


書くこと

スモールステップの繰り返しで、自信をもって英語を書けるよう活動を工夫する。また、作品を発表・掲示することで他者に読んでもらいたいという意欲をもって取り組ませる。



<目指す児童を育てる木>
4技能を活用し、主体的に
自分の思いを伝えようとする児童

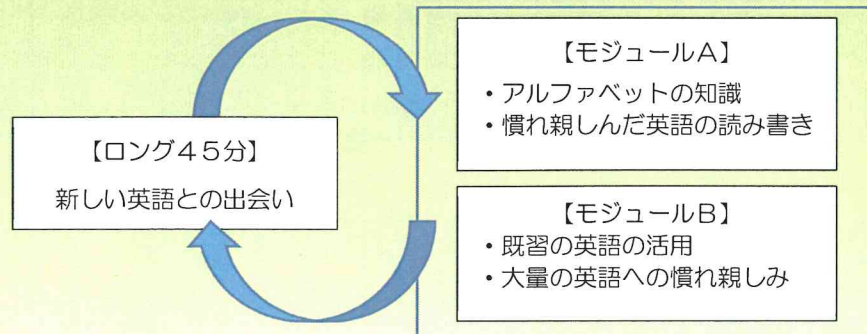


モジュール活動について

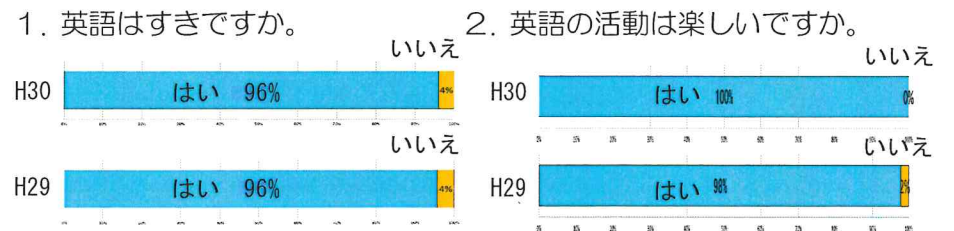
次期学習指導要領より、高学年の授業時数が70時間（週2時間）となる。この時数確保のため、短時間学習（モジュール学習）を週2回行うこととした。モジュール活動の実施に伴った留意点は以下である。

- (1) ロングの45分では、「We Can!」のメインとなるコミュニケーション活動（話す・聞く）のみを行う。
- (2) 「読み・書き」の活動は、モジュールAの時間に集約する。
- (3) ロングで学習した英語を定着させるため、モジュールBの時間で「話す・聞く」活動を行う。意味のわかる大量の英語に慣れ親しませるため、ジョイント・ストーリー・テリングや歌を実施する。

これにより、必要なターゲットセンテンスをロングの授業35時間でカバーできる。また、各授業の目的が明確になり、児童が見通しをもって学習に取り組める・スパイラルの学びが行える、というメリットがある。

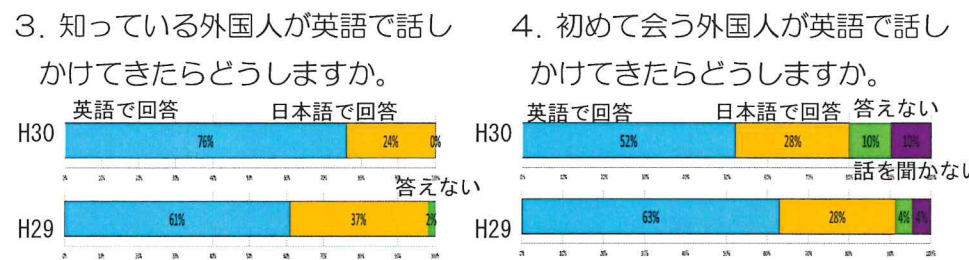


アンケート調査結果



【分析1】

- 1 通常、英語の学習時間が多くなると、英語が嫌い・苦手という児童が増える傾向があるが、本校は向上している。
- 2 H26年度文部科学省の5・6年生の調査結果と比較しても、全国平均の「好き」70.9%に対し本校は100%と、英語への肯定感が非常に高い。これはMorning English等、英語を実際に活用する場があるため、本校児童は英語を使う楽しさと有用感を実感しているためと考えられる。



【分析2】

- 3 H30年度では、「英語で答える・日本語で答える」が100%を占めており、回答の言語はいずれにしても、「ALTの英語での質問は理解できる」という自信をもっていることがわかる。
- 4 一方、よく知らない外国人には、20%が「答えられない・聞かない」と回答している。調査対象が同一にもかかわらず、「知っている・知らない」で差が大きいことから、児童が英語を話すには、安心してリラックスできる学習環境をつくることが重要であることがわかる。

研究の成果と課題

- 英語の発話を急がせず、「聞くこと」を大切に活動継続したことにより、積極的に英語で思いを伝え合おうとする意欲を育むことができた。
- 日々の活用のあることで英語の楽しさを感じ、英語で思いを伝えようとする姿がより見られるようになってきた。
- たくさんの英語の音を蓄積したことにより、抵抗なく音と文字が結びついて文字に表そう・読もうとする態度が育まれた。その結果、意欲的に文字で思いを伝え合おうとする姿が多く見られるようになった。
- 目標を明確にしたことで、児童が「誰のために何をすればよいか」を理解でき主体的に活動に取り組むことができた。またプロジェクト毎に達成感を得ることで、英語でのコミュニケーションの楽しさを感じさせることができた。
- ▲指導方法・内容の継続性を考えた小・中連携の必要がある。
- ▲教師の指導力を維持・向上するための校内研修を充実させていく必要がある。